

## 化政期以降の江戸詩壇

—岡本花亭を中心に—

朱 秋 而\*

### 一、はじめに

近世後期の江戸の漢詩人は、江湖詩社を中心とする下町派と幕府に勤める山の手派に分けることができる。岡本花亭（一七六七～一八五〇）と館柳湾（一七六二～一八四四）は、幕吏でありながら、詩壇の耆老と見られている。市川任三氏は花亭を当時詩壇の「太宗五山」と高く評価している。詩集の出版は何かの原因で途絶えてしまって、完全な詩集が残っていないのが現状である。わずかに『天保三十六家絶句』に一部の作品を見ることができる。本報告では、先学たちの花亭詩の調査と研究を踏まえながら、詩人花亭の作品とその意味をもう一度取り直すことを目的とする。

### 二、詩人花亭の評価と『天保三十六家絶句』

花亭の詩集は現存しないので、『天保三十六家絶句』に収録される三十一首の作品はその詩作の片鱗を知る主要な手立てになる。近世後期の漢詩壇と漢詩人の研究で花亭についての重要な議論は富士川英郎氏の『江戸後期の詩人たち』（平凡社、2012年）と中村真一郎氏の『蠣崎波響の生涯』（新潮社、1989年）である。この絶句集に基づいて花亭詩の特徴を把握しようとする試みをした。資料一（富士川氏）と資料二（中村氏）で示しておこう。それから、花亭の三十一首の絶句を資料三に掲げておく。

#### 資料一

（P128）岡本花亭

化政期以後の江戸の詩人たちがなんとなく、下町派と山の手派の儒者や文人たちと親交があるとともに、一方では江湖社同人をはじめとする下町の詩人たちともしばしば往来して、天保年間には詩仏、五山の二老と並んで、江戸詩壇の耆宿としてひろく称せられていた者に、ふたりの詩名高い幕臣があった。岡本花亭がその一であり、館柳湾がその二である。このうち岡本花亭（一七六八～一八五〇）は名を成、字を子省と言ひ、明和五年に江戸に生まれた。はじめは幕府の勘定方にその小吏として務めていたが、文政元年、二分金改鑄の議が起こったときに反対の意見を具申して容れられず、そのまま五十一歳で職を退いた。その際、

先生老病官を去る時

復た余金の女兒を嫁せしむる無し

笑ふに堪へたり三十年計吏と為り

未だ曾て一算の家私に及ばず

という七絶を賦したところ、これがそれから二十年もたって閣老水野忠邦の眼にとまり、清廉の士だということで、再び信州中野の代官に抜擢されたというのは有名な話である。彼がその後、勘定吟味役から勘定奉行となり、近江守に任ぜられて、嘉永三年（一八五〇）八十三歳の高齢で歿したことは周知のところだろう。

花亭は三度の食事よりも詩が好きだったらしく、その交友にも詩仏や五山をはじめとして文雅の士が多く、殊に菅茶山とは親交があつて、しばしば書簡をやりとりし、詩の応酬もしていたようであ

\* 国立台湾大学教授

る。ところが、このような彼であったにも拘らず、不思議にもその詩集は刊行されていない。従って彼の詩は多く散逸して伝わらず、僅かに『天保三十六家絶句』その他のアンソロジーに採録されているものによって、その一斑が窺い知られるにすぎないが、それらの詩には花亭の人柄をそのままに反映して、温雅にして、重厚な趣きをもったものが少なくない。

だが、一方、花亭は詠物詩は得手ではなかったらしく、また、概して言うとき、彼の詩には新鮮な感覚と、平明素朴な味が乏しく、その取材の奇癖と、学識の荷の勝ちすぎた措詞とが、往々にして清新な詩情の流露を妨げているという欠陥があったようである。文政五年十一月二十三日附きで北条霞亭にあてた書簡のなかで、花亭は自分の詩についての菅茶山の評語を伝えて「此間備後翁（茶山）恵音、拙詩之評被仰下候。浅く近き所をもと被仰下候。誠に欽服仕候」と言っているが、「浅くて近き所」を志せという茶山の言葉は確かに花亭の詩の病患をついたものであったろう。

思うに岡本花亭はその人物が大きくて立派だったことと、地位が高く、しかも詩作に異常に熱心だったことによって、当時その詩才を事実以上に高く買われていたのではなかろうか。……広瀬旭荘も江戸から豊後日田の兄淡窓にあてて、身の近況を報じた書簡のなかで、「岡本花亭翁ハ茶山先生以後之一人と相見候。謙譲之君子而、英気あり、茶山と伯仲の人物也。最早」七十三四の由……私江戸に來り候後、敬服仕候ハ此人第一也」と言っている。

近世後期漢詩の最大の発見者富士川氏は資料一の下線部で述べているように花亭の詩は晩年高官になったゆえ、過大評価されたのではないと厳しい判定を下している。

資料二

(P556) 幕吏 岡本花亭

しかし、「平生甚シク詩ヲ好ミ、出處進退、死生得失、歛欣憂苦、一二之ヲ詞章二寓シ、劇職二在ルト雖モイマダカツテ一日モ之ヲ廢セズ」と墓碑に記すように、彼は前半生の鬱屈した下級官吏時代も、中年の閑のありすぎる失業時代も、晩年の繁忙をきわめた高級官僚時代も、必ず毎日、作詩のなかに内心を吐露することを忘れなかった。それがいつの間にか彼を詩壇の一耆宿の地位にまで、押し上げていったのである。

が、又、山崎美成の『海録』によると、花亭はまた和歌も好んで作つたらしい。号を名乗った際の歌、

住みはてぬうき世のかりの宿ながら  
花のあるじとしばしならなん

又、「一枝栖」とも号したが、その際の歌、

庭すずめやども小笹のひと枝も  
われにことたるすみかなりけり

6 詩人 岡本花亭

まず『天保三十六家絶句』中に収められた三十首ほどの詩から、その詩風をうかがうこととする。ここでは、彼は上巻のはじめに大窪詩仏と菊池五山という当代の両大家の間に据えられ、しかもその採られた詩の数の多さは、中巻の中島棕隠、下巻の頼山陽に伍して、梁川星巖や館柳灣をしのぎ、トップクラスを占めている。堂々たる巨匠扱いである。

が、その詩の実物は、どうも素直にポエジーが感じられるものが少ない。奇妙に作為があり、官職意識が邪魔している。……

杜鵑叫月圖

夏立新鵑叫過時 居人喜聽旅人悲

夜來齊破兩家夢 月照水精花一籬

(夏立チテ、新鵑叫キ過グル時、居人ハ喜ビ聽キ、旅人ハ悲ム。夜來ヒトシク破ル、兩家ノ夢、月ハ照ス、水精ノ花、一籬)

夏になって、新しく生まれたほととぎすが鳴いて過ぎると、同じ声が家にいる者には嬉しく聞え、旅人には悲愁をそそるといふ、このアイディアは

面白い。水精花は水晶花、和名、うつぎ、一名、卯の花だろう。垣根にまじえられて、白い花を持つ。これなどは比較的素直な詩境である。

「文化辛未年、(八年、一八一、時に花亭、四十四歳)、朝鮮通信史来りて対馬に館す。余、職事を以て往く。夜、淀川を下る。雪月清妙、詩、数首を賦して、以て事を紀す。今、退閑、此の図を觀れば、宛然たる真景、恍たる夢境なり。因て旧作の臆に上る者一首を録し」

雪霽長川百里程 官船眠下浪華城 夜深月悄  
無人影 夢破沿堤喝道聲 (雪ハ霽ル、長川、  
百里ノ程、官船、眠リテ下ル、浪華城。夜深  
ク月悄カニステ、人影ナシ。夢ハ破ル、沿堤、  
喝道ノ声)

こうした外交行事にあたるのは、当時の国際語である漢文の修得を専門とする昌平饗の教官たちが当る慣例になっていたから、この行の長官は聖堂の祭酒大学頭林述斎で、それを援けて古賀精里、松崎慊堂などの一流学者がいた。これらの人々と韓使とは宴席において、漢詩を応酬して、歡を尽したのである。その時、花亭も末席にあって相伴に与ったが、韓人は花亭の詩の出来ばえを賞め、又、その細楷の巧みなことに感服したという。……

当時、この朝鮮来聘使接待の行事は、自分の学芸能力が国際的に評価される唯一の機会であったから、若い学者たちはこぞって参加を希望したのである。花亭は幕府官僚の末端にいて、幸運をつかんだのである。……

資料二に見える小説家で江戸漢詩の愛好家である中村真一郎氏の花亭詩についての見解も上掲の通り「どうも素直にポエジーが感じられるものが少ない」と致命的な欠陥があると貶めている。

『天保三十六家絶句』は現存の豊洲のまとまった作品群であるが、詩の題からでも明らかなように、全部題画詩である。次に数例挙げてみよう。

### 資料三

#### 杜鵑叫月圖

夏立新鵑叫過時 居人喜聽旅人悲  
夜來齊破兩家夢 月照水精花一籬

#### 金錢花圖

未被豪門盡斷將 負家隨分貯芬芳  
花神新幣誰言惡 鑄出純金許樣黃

#### 廉塾圖

三塾相臨一水清 金湯難敵擁書城  
及門人在春風裡 花底柳陰絃誦聲

#### 重題黃葉村夕陽村舍圖

白頭感憶舊交歡 淚眼何勝展畫看  
人去鄉庠絃誦絕 一村黃葉夕陽寒

#### 襍画

##### 虎

水性含仁大日東 地鍾靈柎八方同  
不生禽獸害人者 逢著山君唯画中  
蟬

高處栖身韻自清 清風儘好奏希聲  
繁音聒耳被人厭 莫謔若吟鳴不平  
栗毬

外面夜叉瞋怒相 滿頭毛髮豎如針  
忽開口笑何歡喜 無是中藏菩薩心

#### 遊仙圖

遊遍虛空極八垠 駕虹駘靄轉輞輪  
俯看寰海如杯勺 唯見醜雞不見久

確かにここに選ばれた花亭の作品はやや生彩に欠けているように見える。しかし全詩集は不明で編纂者の好みにこうなった結果も考慮に入れて考えなければならぬ。一部の作品から花亭の詩風を判断するのでは、不十分や片面的な視点から全貌を語ろうとする恐れがあるかと思う。他の資料

を取り上げ別な側面から花亭詩を探ってみよう。

### 三、菅茶山・大窪詩仏らとの親交

富士川英郎氏『菅茶山』下による茶山と花亭の交遊の記録を次の資料四で示しておこう。

#### 資料四

文化十一年六月五日に茶山らは江戸に入った。

十四、晴熱、古賀、岡本、狩谷、伊澤及び丸山の諸有司に歴造す。太田氏に過ぎりて留飲す。公、麥を賜う。夜涼しく月佳し]

十月

廿九、晴、寒、白川の…。岡本君、和韻二十余首を寄示す。

十六、晴暖、岡本君の使人来り、疾を問う。

十八、雪、土屋七郎、田内主税、岡本忠二郎、石田宗介来る。

廿六、午後、岡本忠次郎、稲毛尾山を訪い、寛齋翁に赴く、会する者、螻齋、如亭、五山、詩仏及び某。主人書画を出し示す。珍品満口唐山の酒桂口灯口皆唐山の品なり]

廿五、晴、林祭酒及び佐藤捨藏、服部宗侃、樋口、土屋に往きて告別す。広瀬臺八、田内主税、大塚桂、来別して、具を携う。夜、山岡大夫、具を携えて来餞す。武田具を携えて輿に来る。岡本忠次郎来送す。公、紅魚を賜う。太田八郎盛服して、来送す。

五月

廿一、晴……、岡本、田内、平田、萬波甚太郎、菅野岱立、頼子成等の書を得る……谷文晁、太公望を画き、寄せて高齢を壽す]

そして彼はさらに江戸の友人で、「すぐれたるすき人」であった岡本花亭のことを思い出して、次の五言古詩を賦したのであった。

以上のように近世後期の集大成の詩人といわれる菅茶山と花亭の頻繁な雅遊を垣間見ることがで

きよう。また近年、本格的に花亭の詩文を本格的に調査した一冊は、中国文学者高木重俊氏の『岡本花亭』(研文出版、2011年)である。とりわけ花亭と朝鮮通信史の泊翁との詩文の交流、さらに花亭と大窪詩仏一ヶ月以上にわたる二十一首の古詩の唱酬について、氏の綿密な調査と分析は花亭作品の全貌と詩人としての花亭の存在を確かに捕らえている。次の資料五を掲げてみよう。

#### 資料五

天保三年(一八三二)十月十五日、詩仏の江山詩屋で催された詩会と、その後、一ヵ月余にわたって唱酬が続けられた花亭・詩仏の二十一首の作品に注目する。それぞれの詩は各十六句構成で、総計三三六句にのぼるが、この巨大な詩的空間に表れた同庚(時に六十六歳)の老詩人同士の詩的交遊から、彼らの詩歌認識、人生観、交友の一端を探ろうとするものである。ただ、紙幅の都合上、きわめて簡略にしか記述できないのが残念である。

下谷練堀小路の詩仏の江山詩屋において、「後赤壁賦」にちなんだ詩会が行われ、岡本花亭も参加した。しかし花亭、詩仏の唱酬はこの日だけにとどまらず、この詩会の後、閏十一月朔に到る約一ヵ月半の間にも同じ韻字で押する古詩の唱酬を続け、二人が相互に次韻し唱酬した作品は、合計二十一首に至った。それらは詩仏の『詩聖堂詩集』三編卷之七に収載されている。花亭はこの全二十一首の作品を『夢鶴唱和卷』としてもとめ、齋藤拙堂に序文を依頼した。

又次韻畚天民 廿八日

韓客求詩倉卒間、投筆歸帆發島山、我刀筆吏豈詞豪、自愧小詩虛譽高、不及韓貢海東鶴冲天、翅有光輝近日月、我無卓異可旌表、門閭宜為人所小、如今老境非朝市、官跡漚消東逝水、功名何必上麟閣、盛者有衰榮者落、蹇劣幸為閑適客、餘生樂意寄花石、往事感君稱述筆、二十年前夢境歷然出。江戸という名だたる名利の都会に生きてはいるものの、彼らはその雑踏の中に身を囲い込み、功名

利益に心を動かさない永遠の価値を求め、文芸を生き甲斐としている。蘇軾の生き方や文芸の功績に共鳴し、それを受け継ごうとする高尚な文化意識である。

(花亭)

生妬東隣老詩豪  
縦横随意出奇高

対門移住詩壇豪  
隣里生光土価高

乞詩求字填門客  
更責画逋蘭竹石  
終日清忙揮醉筆

惟恨無暇伴我探梅踏雪出

花亭は同時江戸詩壇を代表し、自分と同じ年の大窪詩仏と詩のやり取りをし、詩人としての器量も並みならぬものかと思う。

#### 四、「朝鮮通信史」泊翁との唱和

江戸時代の最終回の朝鮮通信使接待の事務官として派遣された花亭の詩作が偶然朝鮮の副使書記官李明五（号は泊翁、六十二歳）の目に入り、泊翁が花亭と対面して唱和したい旨を一行の対応をする昌平校教官古賀精里に打診したが、制度上実現できなかった。前掲の高木氏は、泊翁と花亭（号、豊洲）との交流のいきさつと詩文の贈答を記録する古賀精里がかかわる『享余一瓣』という写本を入念に調査した。絶句以外の作品を通して花亭を知る重要な資料と言えよう。長い引用になるが、資料六に掲げておこう。

##### 資料六

古賀精里の題詞を見てみよう。書き下し文で掲げることにする。

豊洲は計属を以て韓客に対馬に供辨す。偶たま其の詩什を以て彼に示す者有り、嗟賞して已

まず。懇ろに相見るを求むるも、法として不可なり。即ち数首を寄せ、豊洲の和章を獲て去る。韓客の和詩を乞ふは、実に僮事と為すも、事は遠近に伝播し、文士は多く其の詩名を欣仰す。余は当時対（馬）に在り、其の旗鼓をして相当らしめざるを恨む。然れども瓣を嘗めて鼎を知れば、必ずしも饜飫を待たず。即ち此の帖に觀れば、亦た足れり。壬申八月精里 樸題す。

この両条の文章にある泊翁が見たという豊洲の詩は、いかなる作品なのか分からない。ただ、前者の文章とともに泊翁は、「豊洲の詩を見て、二絶句を以て転呈し、和せられんことを求む」という二首を豊洲に送って唱和を求めた。

ア、想来如隔一重紗  
咫尺居停跡更遐  
具体先知香色品  
君詩吾欲譬名花

豊洲の詩を読んで泊翁は最初に香りと色の品格を感じ、それは名花さのままであると絶賛した。

イ、如今知己白頭親  
万里滄溟猶比隣  
但恐一朝交臂失  
東歸長作夢中人  
朝鮮国副使書記泊翁

これを読んで、豊洲も唱和の詩を送ってきた。

a 想見清容月在紗  
芳津室邇恨人遐  
小詩誤品称香色  
唯是無名野草花

豊洲の詩風は、自己の思いを素直に詠じる抒情性に富んでいると泊翁は見ているようである。これは、のち齋藤拙堂が「豊洲先生詩集序」の中で、「余、嘗て関東の詩風を論するに、享保の際には人人盛唐摹剽し、多く後人の笑ひと為る。然れども古風・長篇には猶ほ採るべき者あり」と述べ、続けて、どの詩体もみな善くする豊洲は、律詩・絶句の中に工みさを追求するよりも、歌行詩などの古風・長篇の精神を守っていたと記す。おそら

く泊翁の評価の認識と重なるだろう。

なお、国会図書館蔵の『享余一擧』の写本には、後日談が付せられ、右の泊翁の評に続けて次のようにいう。

従前に無き所と謂ふべしと。頼春水伝へ聞き、精里に書を与へて之を問ひ、且つ謂ひて善評と為す。精里答へて曰く、「然り、固に筆談の数条を挙げて、詳かに其の賞賛の言を告ぐるなり」と云ふ。

これまでないものであると泊翁は述べた。(中略) 精里もまた「その通りです、もともと筆談の数条を取り上げただけで、詳細に泊翁の賞賛の言葉を示すことができました」と答えた。続いて豊洲の、第二首を取り上げる。

- b 萍水未逢情已醜  
無端文字結為隣  
一言長作知心友  
異域終非交臂人

豊洲の詩は、古詩の風格とつややかな響きを漂わせる詩美をもって古人に肩を並べているのである。東の対馬に来て幸いにも人を驚かす表現を見たとは、まさに泊翁の絶大な賞賛に他ならない。

豊洲はさらに唱和の詩を泊翁に届ける。第一首は次の通り。

- c 龐眉皓髮帽烏紗  
想像伊人清福遐  
年老風流才不老  
奇紛吐出筆端花  
次に第二首。

- d 士將同氣時相親  
休說殊方与比隣  
請見世間今也古  
紛紛市道面交人

今よりして後、我と泊翁と、神交心契、長へに斯くの如くなるのみならば、則ち異域も猶ほ比隣のごとく、万里も亦た咫尺なり。

文化八年辛未六月廿日 豊洲

豊洲の船が去ったその二十一日の夜、泊翁はたま

たまに酌庵で飲んでいた。豊洲の詩がもたらされると、一座の人はみな口ぐちに伝誦した。泊翁は筆を取って手紙を書き、豊洲の詩を届けた人に預けた。それは次の通り。

泊翁の手紙は、「又」と題してさらに続く。

二三日、轟飲澆墨す。老いて亦た之を為すは、幸ひに鼓前に此の語を伝致せんが為なり。豊洲は傑士なり、当に領会すべし。古より文士はみな英傑なるに、比は文を知らざる者と道ふべからず。

豊洲に対する泊翁の思い入れは、これほど深いものなのであった。

おそらくそれも豊洲の十余篇の詩の一部なのであろう。まず泊翁の「偶たま醒翁の韻に次す」を見よう。醒翁は、豊洲の別号である。

- ウ、衣衫生醜黄梅雨  
南烹久飫捉鯨戸  
吾家細弱常関情  
見詩驚喜呼児浦

辛未六月 朝鮮泊翁

豊洲の詩を見て驚喜しました。呼児浦とあったものですから。

呼児浦は、現在佐賀県東松浦郡呼子町大字呼子の呼子港。去る三月下旬、対馬に向かう豊洲たちの一行は、呼子浦で風待ちをした。豊洲はそこで「呼児浦阻風」詩を作っていた。それが泊翁の目に入ったのである。

- e 桜花落尽清明雨  
遠思迢迢憶江戸  
行路四千春欲闌  
客船猶滯呼児浦

これを読んだ泊翁は、「呼児浦」に瞠目した。「児を呼ぶ」とは、これも長旅の中にある泊翁が故国に残した妻子を気にかける心情につらなる。それをテーマに泊翁は豊洲の詩に次韻したのである。

泊翁は、精里に託した豊洲の要請に応じて「画幅題賛」という文章を書いた。……『芳津館筆談』抄録に精里と泊翁と次のような対話（筆談）をし

た。

精里 「豊洲はわが莫逆の友です。さきのお褒めの言葉は、わたしの名誉でもあります。」

泊翁 「豊洲の詩は非常に立派です。僕と四篇を唱和して、会えないまま先に帰りました。いまでも残念です。……豊洲の詩は、古人と拮抗します。今の世の章句の小儒とは比べようがありません。あなたも親友となれば、僕と同じ気持ちではないでしょうか。さきに松崎慊堂に尋ねたところ、ただ豊洲は楷書に優れていますという答え、期待はずれで僕をがっかりさせました。

精里 「わたしを知る者は稀なのにわたしは重んじられています。まして豊洲を知る者にはあなたがおられます。わたしなどが繁々を願ってはならないのですね。」

泊翁 その通りです。その通りです。あなたの今のお言葉は、まったく永久に不遇な友人たちに一斉に感激の涙を流させます。

精里 とは言え、豊洲の能力によって抜擢されて計吏になっています。前途は分かりません。泊翁が深くお考えならず、豊洲の志を得られずに苦しむ人とは思われるのは、誤りです。

泊翁 「名譽と地位はの薫灼のようなもの、文章は永遠に不朽です。窮達を問題にする必要はありません。幸いに泊翁の言葉を豊洲にお伝えくださったらどうでしょうか。」

豊洲は通信使たちから非常に高く評価され、古賀精里もまた十七歳年下の豊洲を心から敬愛していたことがよく分かる。

高木氏が指摘したように、泊翁李明五は花亭のよき理解者である。李明五は幕府接待役の儒者詩人たちの詩作よりも花亭の詩に共感を覚えたのはなぜだろう。彼の詩集『泊翁詩鈔』を繙いてみると、その答が見つかるかもしれない。実は詩集巻四「賦雪、次道泉李注書」に

或有人嗤点我詩為宋調、是不然、我詩自我詩、胸中有可悲者、遇物而起、衝口而發、自哭其悲、自笑其喜而已、顧何有於宋哉。

と、詩風は宋詩を祖述していると嗤われていたが、自分の実感と実情に基づいて悲しみや喜びを忠実に詠じているだけで、宋詩に何の関連があろうかと自分の詩作態度を述べている。詩集の詩題を見れば、確かに南宋三大家范成大・楊万里・陸放翁の作品に次韻する作品を散見できる。とくに陸放翁詩が一番よく出てくる。

李明五の詩風と詩作方法は、花亭の忘年の交である菅茶山に通じるものは多い。こういう詩作信念と詩風の類似性は泊翁の豊洲に対する高い評価に深く関わっていると言えよう。

## 五、おわりに

八十四歳まで長生きした近世後期の江戸詩壇を代表する岡本花亭の詩の大半は散逸してしまったが、天保年間に医者三上恒が編纂したアンソロジーをに収録される絶句三十一首のみで花亭の詩風や詩人としての位置づけを考えるのは、部分から全体を捉える不完全さに陥りかねない。菅茶山と同じ、漢詩と和歌を善くし、楷書が上手な優れた好き人であった。とりわけ、古詩、歌行が得意である。

事務官で最後の朝鮮通信使との文化交流に参加でき、規定上、朝鮮の使節と直接会って交流することはできなかったが、古賀精里の理解と仲介を通して副使書記官李明五泊翁との深い交流は素晴らしかった。儒者の出ではなかったが、通信使たちに高く評価されたことは花亭の詩名を全国に轟かせたと思う。

晩年、同庚で知友の下町派詩人大窪詩仏との十首ほどの長詩の唱酬は、江戸詩壇の耆宿と目される花亭の詩人としての資質と重みを自ずと証明していると言っても過言ではないだろう。

参考文献

1. 富士川英郎編『詞華集 日本漢詩』8所収（汲古書院、1983年）、三上恒編『天保三十六家絶句』、斎藤拙堂序、天保九年刊。
2. 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』、平凡社、2012年（1966年に麦書房より刊行された。）
3. 富士川英郎『菅茶山 下』、福武書店、1990年。
4. 高木重俊『岡本花亭』、研文出版、2011年。
5. 李元植『朝鮮通信使の研究』、思文閣出版、1997年初版、2006年第二版。
6. 帶琴樓編『泊翁詩鈔』「韓國文集叢刊續」第百二輯。